

# コロナ禍を経験した高校生の生活と意識に関する調査報告書 〔概要〕

このたび、国立青少年教育振興機構では、令和3年9月～令和4年2月に高校生を対象として実施した標記の国際比較調査の結果を取りまとめたので報告する。

## 調査からみる日本の高校生の主な特徴 ※（ ）内は本概要の掲載ページ

今回の調査では、勉強、身体活動と感染予防行動、メンタルヘルス、人間関係、ライフスキルや将来への意識等について、コロナ禍を経験した高校生の実態や変化を捉えました。

### 1 学校のオンライン授業が効果的だと評価している割合が6割弱。

学校のオンライン授業について、「集中して学習できた」が55.7%（「全くそうだ」「まあそうだ」と回答した割合、以下同様）、「授業内容が理解できた」が64.3%といずれも中国に次いで高い。

学校のオンライン授業が「とても効果的」「まあ効果的」であると回答した割合が59.0%で、コロナの感染が拡大した場合、オンライン授業より「対面授業がよい」と回答した割合が27.0%にとどまり、4か国中最も低い。→(p.4～)

### 2 「対面でのコミュニケーションは大切だと思うようになった」が56.2%。

コロナ禍を経験して、「友達の大切さを感じるようになった」「対面でのコミュニケーションは大切だと思うようになった」と回答した割合が、いずれも55%を超えている。→(p.6)

### 3 運動量が「減った」のは36.2%で、4か国中最も高い。

コロナ禍前に比べて現在の運動量が「非常に減った」「少し減った」と回答した割合が36.2%と4か国中最も高い。また、この一年間、キャンプ、山登りやハイキングなどの野外活動をしたことが「1度もない」と回答した割合が7割強と、4か国中最も高い。2017年の調査に比べて、経験していない割合が高くなっている。→(p.7)

### 4 情緒が安定的になっている一方で、約6割強が「新型コロナウイルスがとても怖い」と回答。

「神経がたかぶり、心が安定しない」「なんとなくいらいらする」「眠れない」「ものごと集中できない」の割合がいずれも4か国中最も低く、2017年の調査に比べて、例示した不安な情緒を表す6項目とも「ない」と回答した割合が高くなっている。→(p.8)

また、「新型コロナウイルスがとても怖い」と感じている（「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答した、以下同様）者の割合が59.2%と、米・中より高い。また、「新型コロナウイルスで命を失うことを恐れている」の割合が47.0%と、米・中・韓を大きく上回っている。→(p.9)

### 5 将来への不安を抱えながら、「いま」を楽しむ。

「自分の将来に不安を感じている」「将来のことを悩むより今を楽しみたい」について、「よくあてはまる」「まああてはまる」と回答した割合がいずれも76%を超え、米・中・韓に比べて最も高い。他方、「将来への希望を持っている」「自分の将来の目標をはっきり決めている」の割合が、いずれも4か国中最も低くなっている。→(p.10)

## 【問い合わせ先】

国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1  
 TEL : 03-6407-7741 Email : kenkyu-soumu@niye.go.jp

## ・考察(要旨)

### コロナ禍における高校生の将来に関する意識の国際比較

和洋女子大学人文学部心理学科 教授 池田 幸恭

日本、米国、中国、韓国におけるコロナ禍を経験した高校生の生活と意識に関する調査の追加分析を行い、4か国の比較をとおして高校生の将来に関する意識の特徴について論じた。

米国、中国、韓国と比べて、日本の高校生の将来への希望は小さく、将来への不安も大きいことに加えて、将来の希望と目標は現在の勉強との結びつきが弱い状況にあることが示唆された。さらに米国と中国に対して、日本と韓国では、人生目標を持つことが将来への希望や将来に備えた現在の勉強と明確に結びついていなかった。

日本では、将来への希望あるいは不安を意識しているほど新型コロナウイルスへの恐怖が強くなることが示された。コロナ禍を経験した高校生の将来に関する意識について、コロナ禍による影響と明確に関連しない、コロナ禍による影響へ柔軟に対応しながら培っている、各国のコロナ禍の被害の程度や対策の厳しさによって影響を受けているという3つの可能性を指摘した。

### 高校生におけるライフスキルと新型コロナウイルスに対する感染予防行動との関連

人間環境大学総合心理学部総合心理学科 講師 嘉瀬 貴祥

日本、米国、中国、韓国の高校生におけるライフスキル(意思決定スキル、情動対処スキル、効果的コミュニケーションスキル、対人関係スキル)と新型コロナウイルスに対する感染予防行動との関連を検証した。分析の結果、ライフスキルと感染予防行動の関連においては、日本と他国に共通した傾向があるなかで、差異が認められることも示唆された。概観すると、意思決定スキルと対人関係スキルは、多くの感染予防行動と関連を持つことが示された。すなわち、感染予防行動の促進に対しては、感染症に関する情報を収集・整理し、計画的に行動するスキルや、他者への共感や配慮を表現するスキルが関連する可能性がある。特に、他国との結果比較を踏まえると、日本の高校生においては、意思決定スキルが他国より重要な位置づけとなる可能性が示された。

### コロナ禍における高校生のメンタルヘルスと運動量との関連

千葉工業大学先進工学部教育センター 助教 遠藤 伸太郎

コロナ禍を経験した日本、米国、中国、韓国における高校生のメンタルヘルスと運動量について追加分析を行い、両者の関連を検討した。分析の結果、日本と米国のように運動量が多く、メンタルヘルスが良好または不良な場合、両者の間に関連性がみられなかったが、中国と韓国は両者の間に関連性がみられた。国により結果が異なった理由として、運動量だけでなく、その内容や体験の影響が示唆された。また韓国を除いて、運動不足を実感していることがメンタルヘルスの悪化と関連していたため、今後は運動量を確保しつつ、個々が運動不足を実感しないような取り組みが求められることが示唆された。

以上のことから、日本の高校生の場合、メンタルヘルスの改善において、運動は重要な役割を果たすと考えられるが、その取り組み方については、運動量のみに着目するのではなく、個々がその運動をどのように感じるのかという主観的な側面も重視する必要があるといえる。

## 調査の概要

### 1 調査の目的

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、高校生たちの学校生活や日常生活は大きく変化した。そこで、コロナ禍を経験した高校生たちの勉強や日常生活、対人関係・感情、及びメンタルヘルスなどにどのような変化があったか、また、新型コロナウイルスに対する不安感や感染予防行動等を把握する。さらに、運動量やライフスキル、将来に関する意識とコロナ禍に対する捉え方との関係を分析する。これによって、青少年の健全な育成に関わる基礎資料を提供することを調査の目的とする。

### 2 調査方法等

調査時期、調査対象などは次のとおりである。

	日本	米国	中国	韓国
調査機関	国立青少年教育振興機構	一般財団法人日本児童教育振興財団(委託)	中国青少年研究センター	ソウル YMCA、韓国多文化青少年協会
調査時期	2021年9月~2022年2月	2021年9月~12月	2021年9月~12月	2021年9月~2022年1月
学校数	29	13	24	34
調査地域	24	11	6	6
調査方法	集団質問紙法(18校) 学校を通してのWEB調査(11校)	学校を通してのWEB調査	WEB調査(学校でパソコンやスマートフォンなどで回答)	集団質問紙法
有効回答者数(人)	4241	1900	3435	1838

### 3 調査対象者の基本属性

		日本	米国	中国	韓国
性別	男	47.9	49.0	49.1	50.8
	女	49.6	47.9	50.9	49.2
	どちらとも言えない	1.0	1.6	-	-
	答えたくない	0.9	1.5	-	-
	無回答	0.6	0.0	0.0	0.0
学年	高1	37.3	33.6	30.5	36.9
	高2	32.3	33.7	40.3	34.1
	高3	30.1	32.7	29.3	29.1
	無回答	0.3	0.0	0.0	0.0
実数(人)		4241	1900	3435	1838

#### 4 調査結果からみる日本の高校生の特徴

##### 1) 学校のオンライン授業が効果的だと評価している割合が6割弱。

日本の高校生は、オンライン学習を利用したことが「ある」と回答した割合が65.4%と、コロナ禍前2019年の調査に比べて高くなってはいるものの、4か国中最も低い。そのうち、コロナ禍後、「学校の授業でオンライン学習を利用した」が72.5%となっている（図1、図2）。

学校のオンライン授業について、「集中して学習できた」が55.7%（「全くそうだ」「まあそうだ」と回答した割合、以下同様）、「授業内容が理解できた」が64.3%といずれも中国に次いで高い。一方、「対面の授業より先生に質問しやすかった」「対面の授業より友だちと議論や話をしやすかった」が2割未満で、米・中・韓より低い（図3）。

学校のオンライン授業が「とても効果的」「まあ効果的」と回答した割合が59.0%となっており、コロナの感染が拡大した場合、オンライン授業より「対面授業がよい」と回答した割合が27.0%にとどまり、4か国中最も低い（図4、図5）。

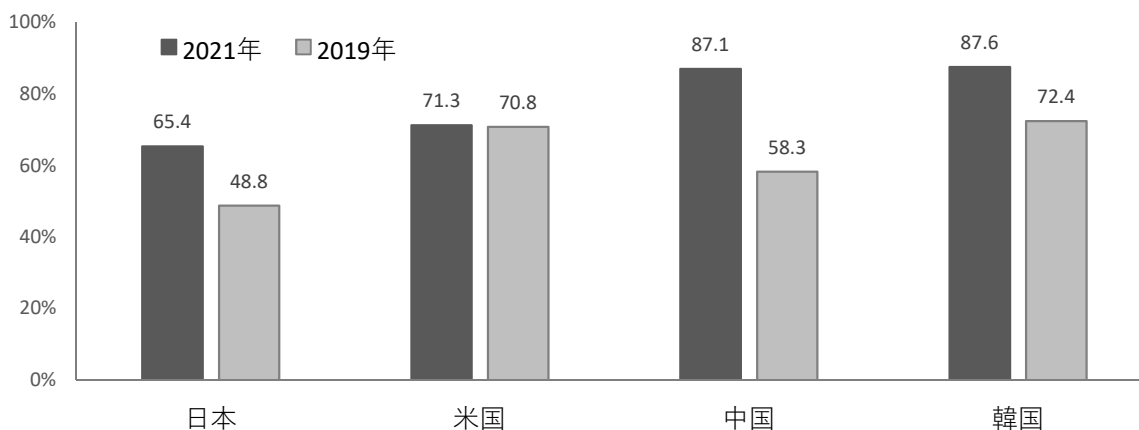


図1 オンライン学習を利用したことが「ある」と回答した割合  
2019年:「高校生のオンライン学習に関する意識調査」(国立青少年教育振興機構)

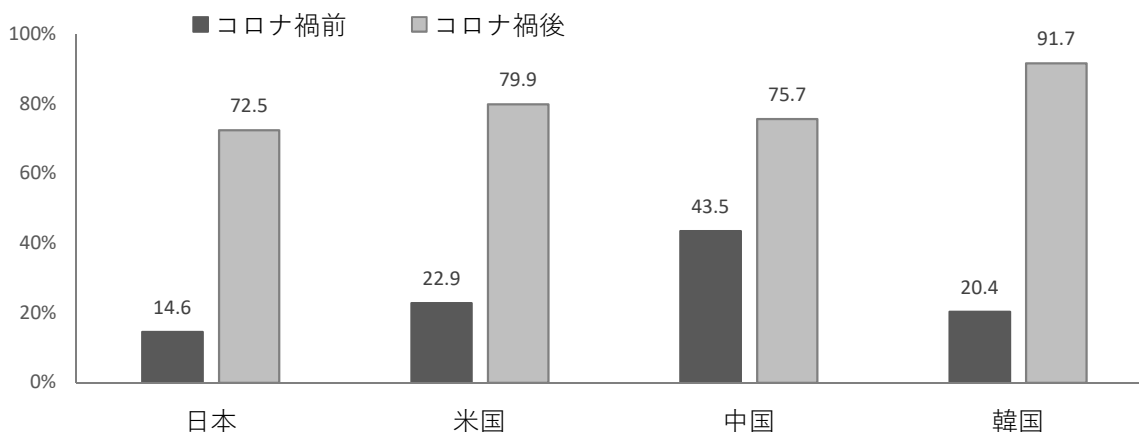


図2 学校の授業でオンライン学習を利用したことが「ある」と回答した割合

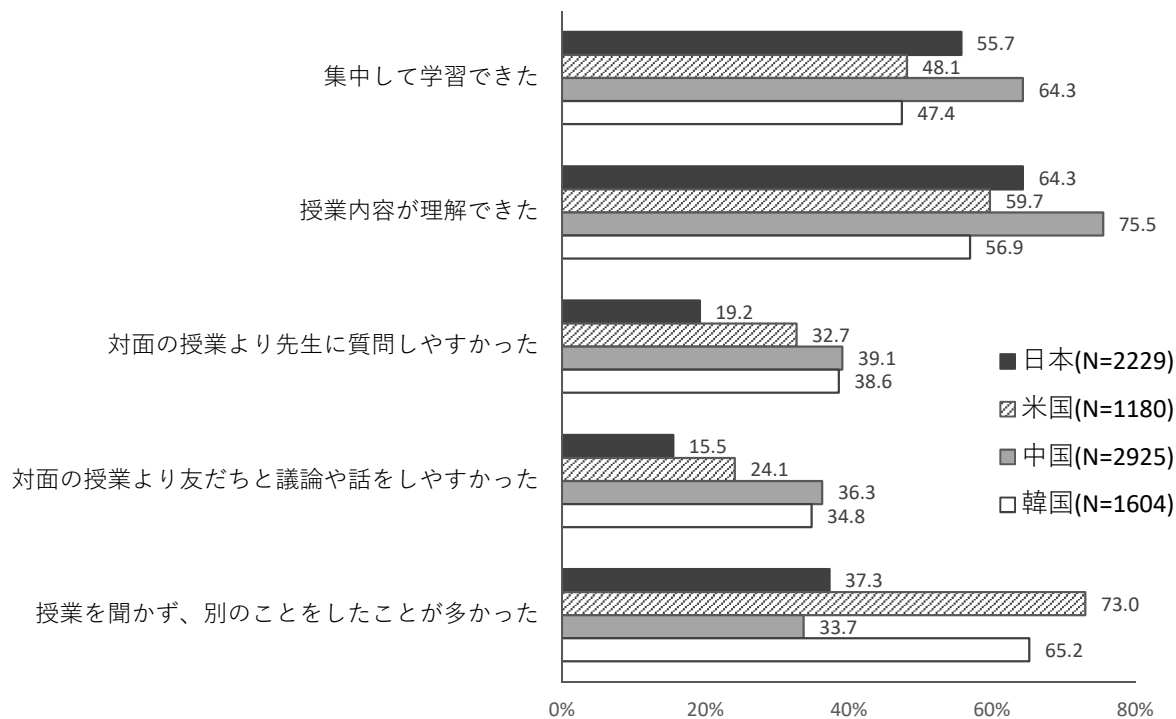


図3 学校の授業をオンラインで受講をしている時の状況  
 (「全くそうだ」「まあそうだ」と回答した者の割合、「受講したことがない」と回答した者を除く)

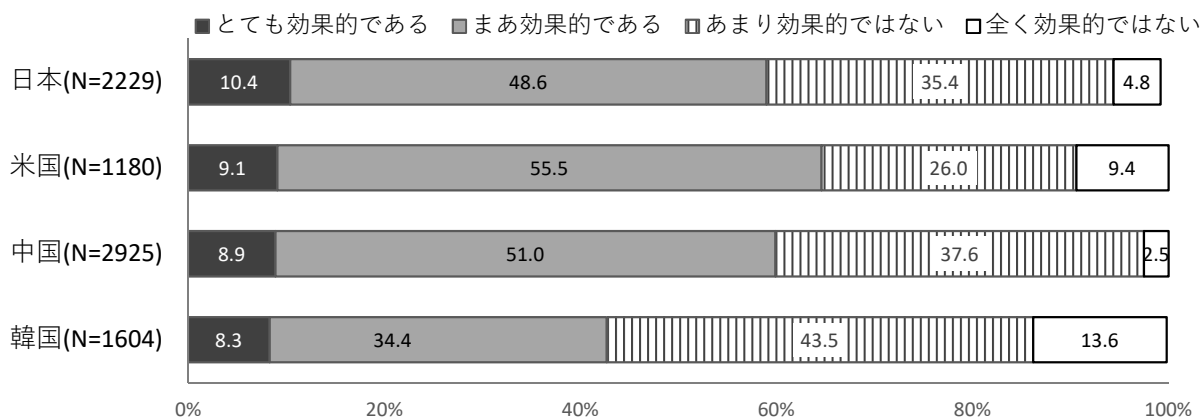


図4 学校のオンライン授業の効果(「受講したことがない」と回答した者を除く)

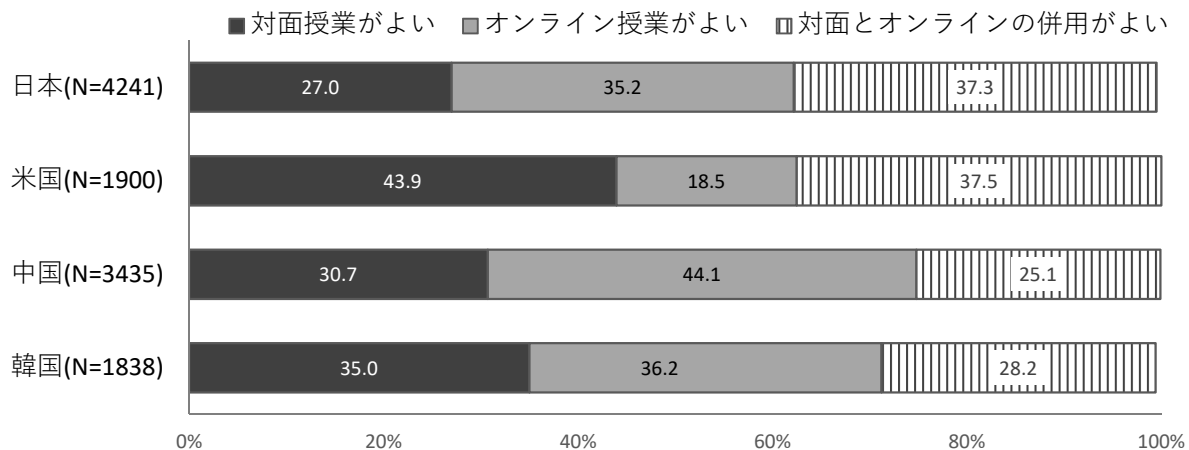


図5 コロナの感染が拡大した場合、対面授業とオンライン授業のどちらが望ましいか(全調査対象者)

2 「対面でのコミュニケーションは大切だと思うようになった」が56.2%。

日本の高校生は、コロナ禍を経験して、「友達の大切さを感じるようになった」「対面でのコミュニケーションは大切だと思うようになった」と回答した割合が、いずれも55%を超えている。これに対し、「勉強の大切さを感じるようになった」が19.6%、「勉強を自らすようになった」が11.6%となっており、いずれも4か国中最も低くなっている（図6）。

また、コロナ禍前に比べて、勉強の負担は、「非常に大きくなった」「少し大きくなった」と回答した者の割合が42.9%と、米・中・韓に比べて最も低くなっている（図7）。

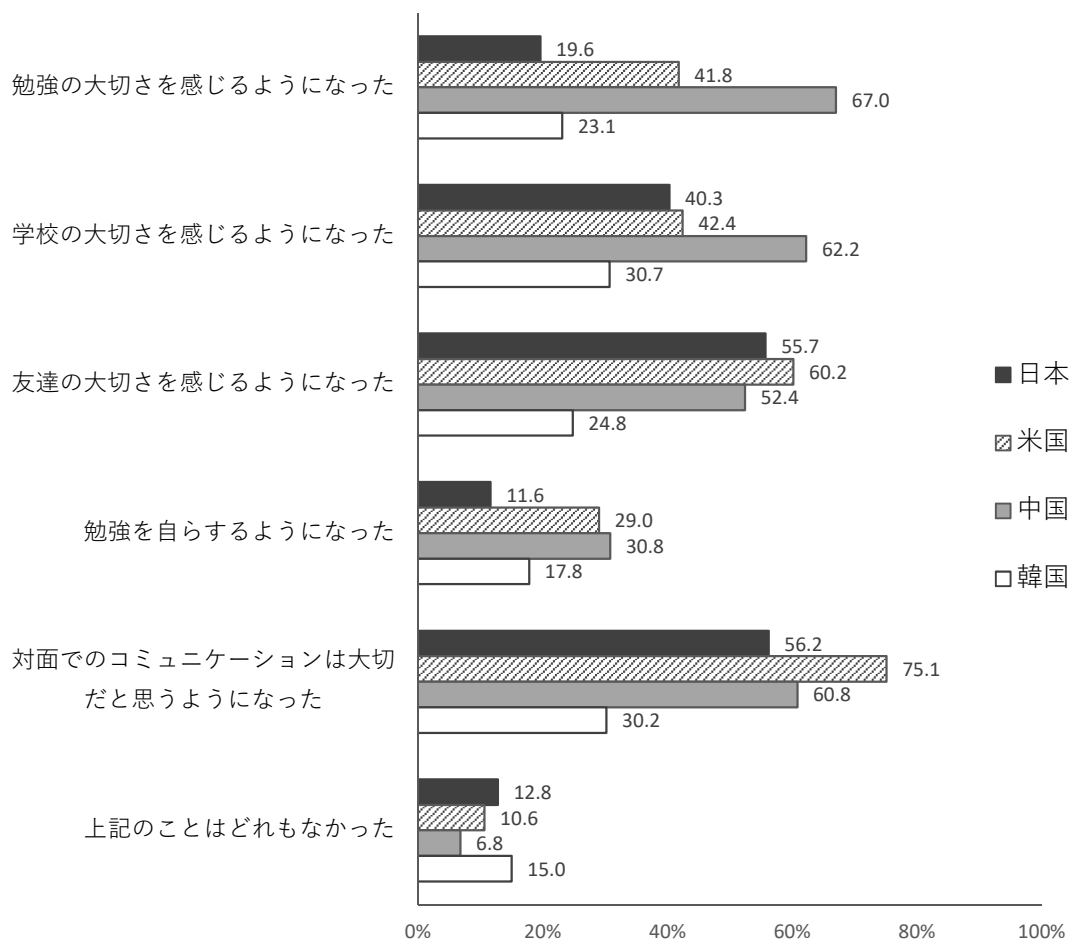


図6 コロナ禍を経験して感じたこと（複数回答）

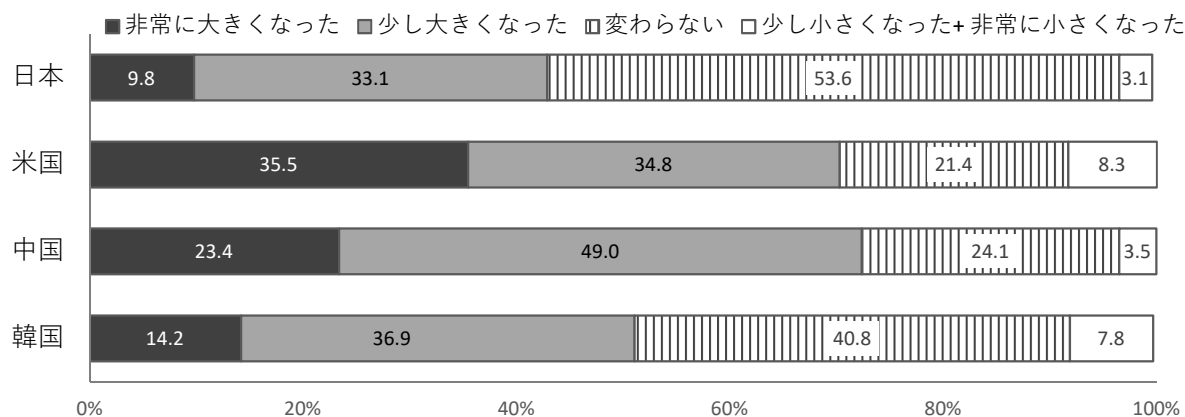


図7 コロナ禍前に比べて、勉強の負担は大きくなったか

### 3 運動量が「減った」のは36.2%で、4か国中最も高い。

日本の高校生は、コロナ禍前に比べて現在の運動量が「非常に減った」「少し減った」と回答した割合が36.2%と4か国中最も高い。また、この一年間、キャンプ、山登りやハイキングなどの野外活動をしたことが「1度もない」と回答した割合が7割強と、4か国中最も高い。2017年の調査に比べて、経験していない割合が高くなっている（図8、図9）。

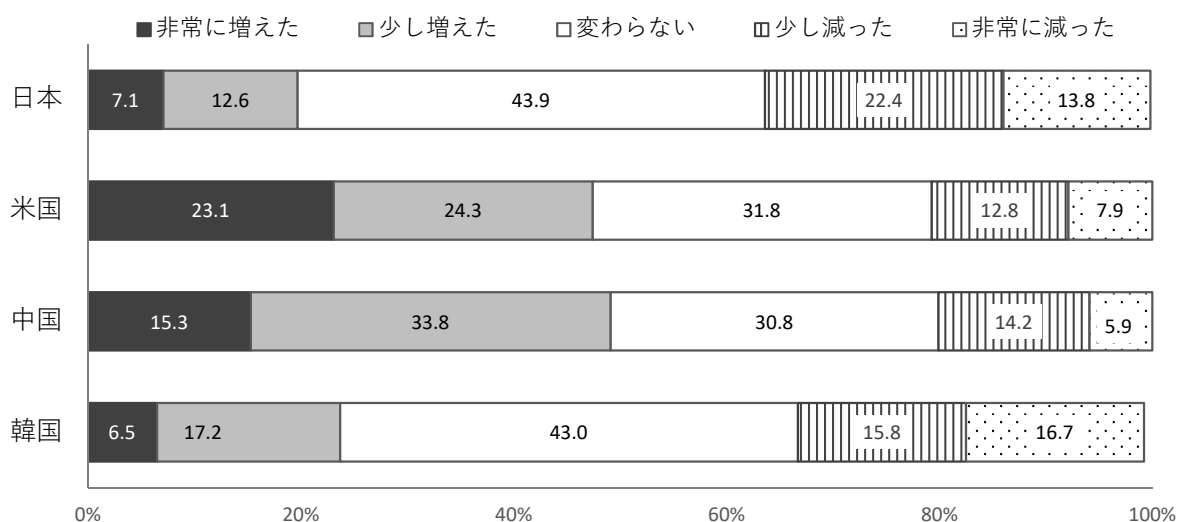


図8 現在の運動量はコロナ禍前に比べて変わったか

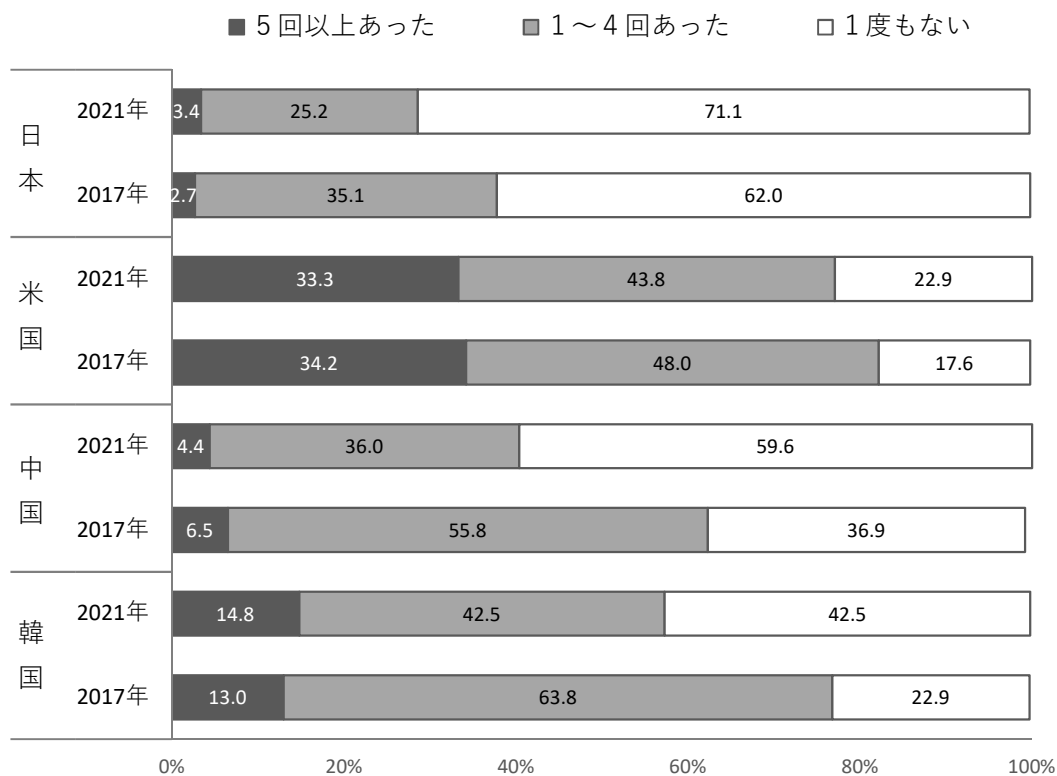


図9 この一年間、キャンプ、山登りやハイキングなどの野外活動をしたことがあるか  
2017年:「高校生の心と体の健康に関する意識調査」(国立青少年教育振興機構)

4 情緒が安定的になっている一方で、約6割強が「新型コロナウイルスがとても怖い」と回答。

日本の高校生は、最近「落ち込む」という心情が「よくある」「ときどきある」と回答した割合が43.3%と、米国に次いで高いが、「神経がたかぶり、心が安定しない」「なんとなくいらいらする」「眠れない」「ものごとに集中できない」の割合がいずれも4か国中最も低い(図10)。

2017年の調査に比べて、例示した不安な情緒を表す6項目とも「ない」と回答した割合が高くなってきている(図11)。

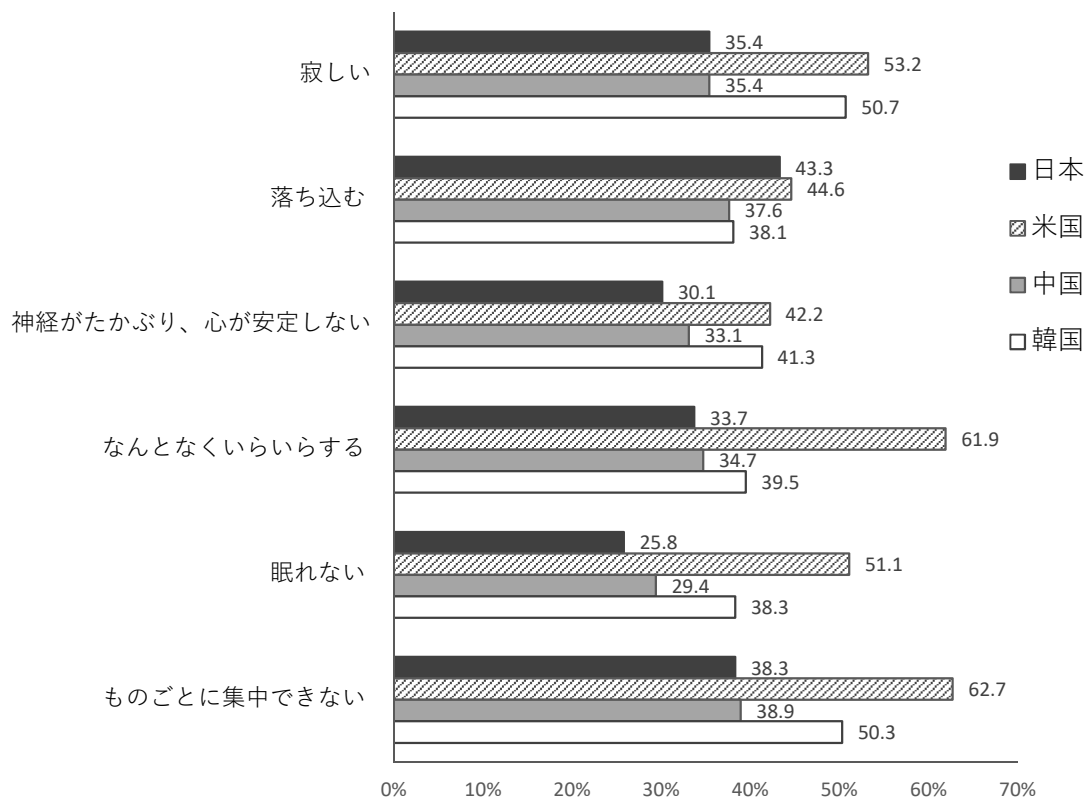


図10 最近、上記のことを感じたことがあるか(「よくある」「ときどきある」と回答した者の割合)

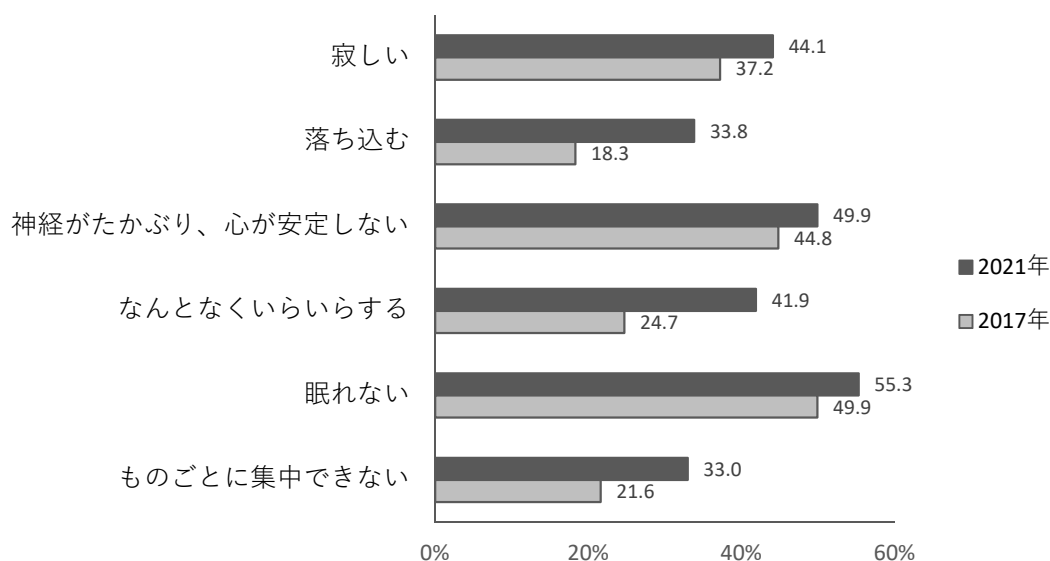


図11 最近、上記のことを感じたことがあるか(「ない」と回答した者の割合、日本)

2017年:「高校生の心と体の健康に関する意識調査」(国立青少年教育振興機構)



日本の高校生は、「新型コロナウイルスがとても怖い」と感じている（「とてもあてはまる」「あてはまる」との回答、以下同様）者の割合が59.2%と、米・中より高い。また、「新型コロナウイルスで命を失うことを恐れている」の割合が47.0%と、米・中・韓を大きく上回っている。他方、「新型コロナウイルス感染が心配で眠れない」「新型コロナウイルス感染について考えると、心拍が早くなったり、動悸がしたりする」「新型コロナウイルスについて考えると手汗をかく」の割合がいずれも4%未満で、4か国中最も低い（図12）。

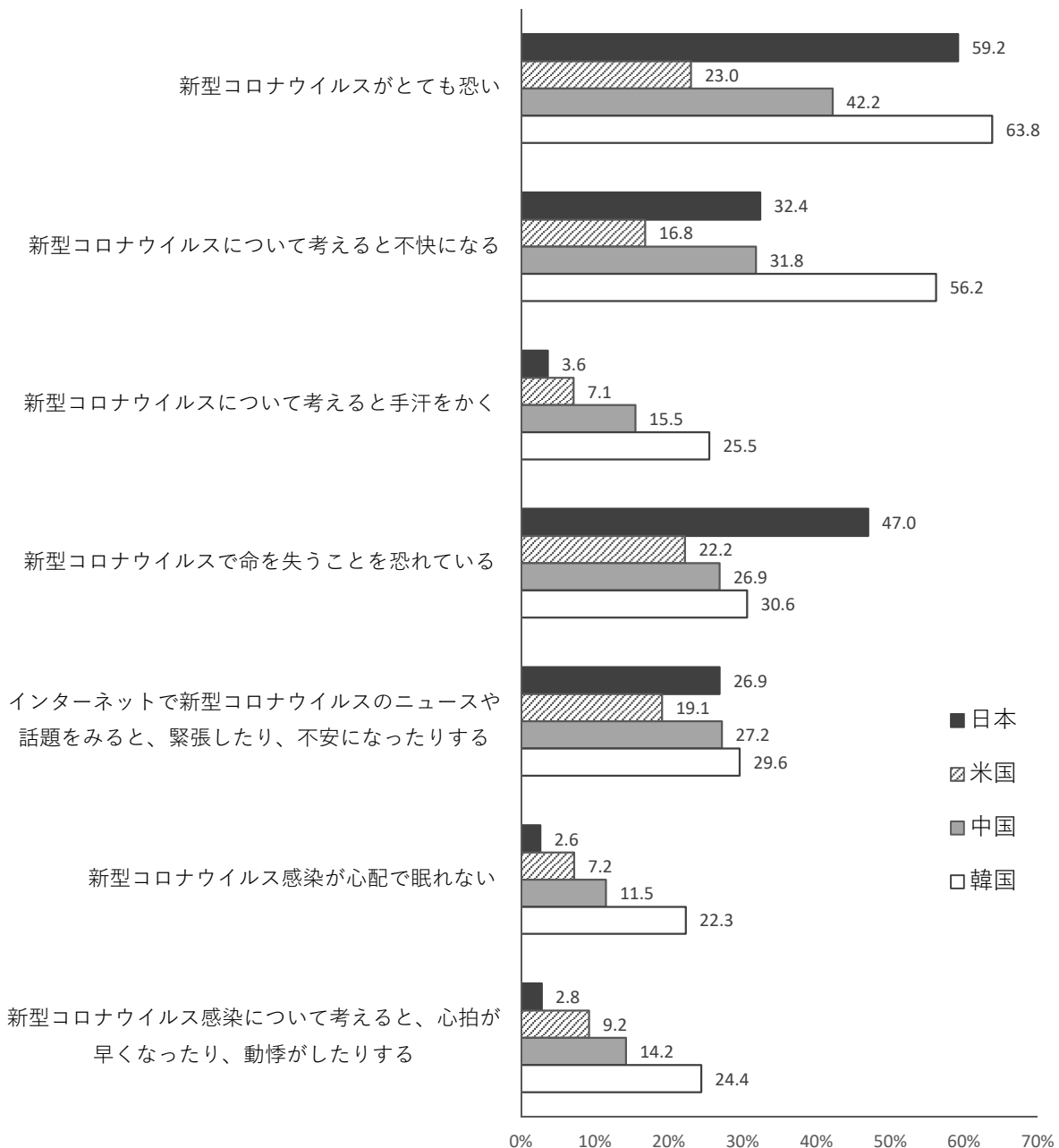


図12 新型コロナウイルスへの恐怖感(「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答した割合)

5 将来への不安を抱えながら、「いま」を楽しむ。

日本の高校生は、「自分の将来に不安を感じている」「将来のことを悩むより今を楽しみたい」について「よくあてはまる」「まああてはまる」と回答した割合がいずれも76%を超え、米・中・韓に比べて最も高い。他方、「将来への希望を持っている」「自分の将来の目標をはっきり決めている」の割合が、いずれも4か国中最も低くなっている（図13）。

また、「将来への希望を持っている」「自分の将来に不安を感じている」について、2018年の調査に比べて、「よくあてはまる」「まああてはまる」と回答した割合が、日本は2つの項目とも高くなっている（図14、図15）。

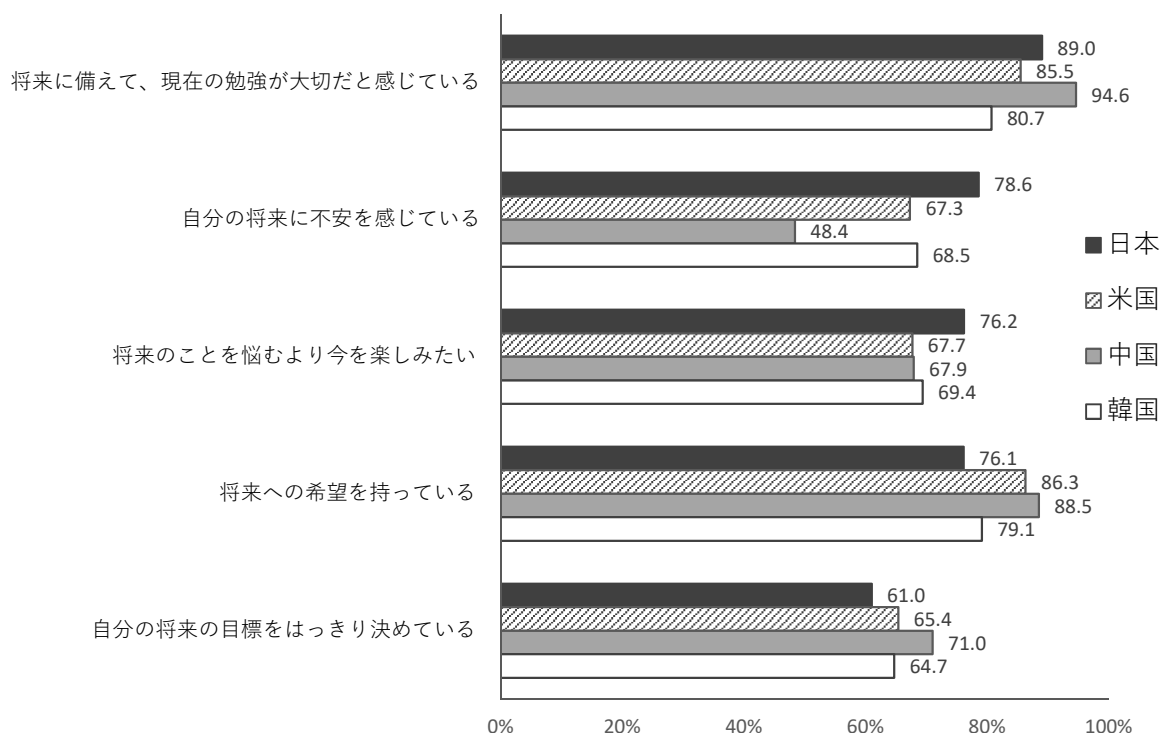


図13 将来に関する意識(「よくあてはまる」「まああてはまる」と回答した者の割合)

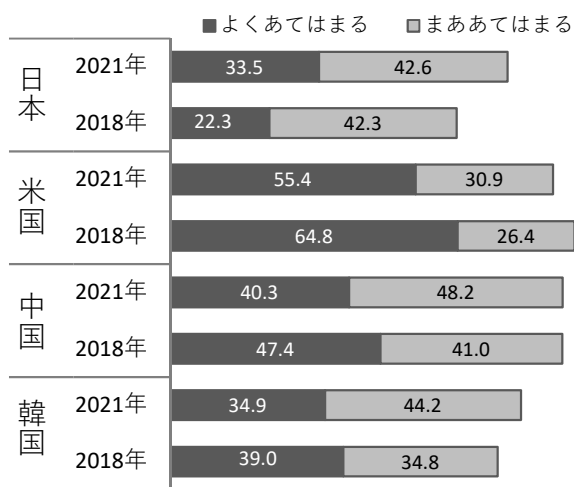


図14 将来への希望を持っている

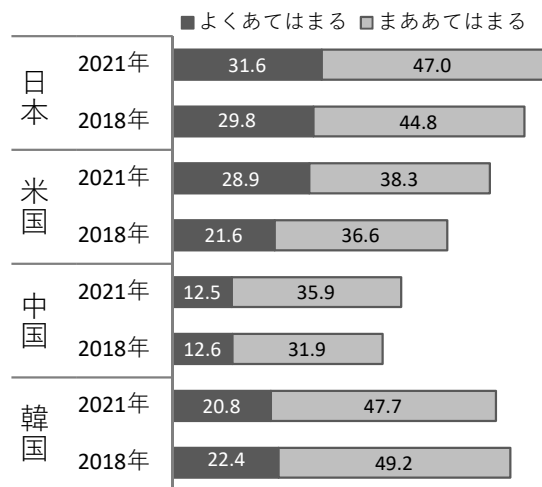


図15 自分の将来に不安を感じている